

小中高校、地域、家庭でも育成。  
しかし、大学で育成するメリットは、  
学生、教員、大学にとって大きい

社会人基礎力はいつ、誰が育てるべき

では、「社会人基礎力」は、どのくらいの年齢で育てるのがよいのでしょうか。

基本的には、どのような年齢でもかまわないと思われれます。いかなる年齢でもその力を発揮する場面はありますから、その力の発揮を心掛けていれば、いつでも伸ばせるからです。しかし一方で、「社会人基礎力」は、高めようとする意識が低ければ低下してしまうものでもあります。その意味で、常に高めようとする意識が必要と思われれます。

とはいうものの、やはり成長しようというエネルギー、他人や環境から受ける影響への順応性の高さ、発想の柔軟さ、そして社会に対する畏怖感や謙虚さなどを持つ、子どもや

若者にこそ育ちやすい能力・資質とであることに間違いはないでしょう。

「前に踏み出す力」の背景にある達成動機などは、まさに若い時代でないと育たないと言われています。「チームで働く力」など他者との関係を構築するような力も、やはり10代の頃に原型が作られるようです。したがって、本格的に仕事を始める前の大学時代は、「社会人基礎力」の育成において非常に大切な時期と言えるのではないのでしょうか。

大学教育では、このようなことを念頭に置いて学生に接していくことが必要であると思われれます。

日常的に接する大人の責任、地域の教育力の向上も有効

ところで、「社会人基礎力」は、実際に体を使って行動し、いろいろなことを感じ考えながら習得されていく側面が強いものです。ですから、日常生活を通して育成される側面も大きいと言えます。家庭や学校、それ以外にも親類、地域、アルバイト先やボランティア先の人々など、子どもや若者に関わるあらゆる人が、彼らと接する際には、意識的に「社会人基礎力」を高める働きかけをしていくことが非常に大切です。

その意味で、地域コミュニティにおける教育力の向上も課題でしょう。大人は、機会があれば子どもや若者に話しかけたいものです。彼らのしていることに関心を持ち、話しかけ、説明を求めたり、認めてあげたりといったコミュニケーションを取ること、また、彼らに規則を守らせたり、してはいけないことはいけないと伝えるなど、礼儀や規律を求めるのも大切なことです。そういう姿勢や態度が取れているかどうか、大人は今一度自らを

- 小中学校・高校では  
各科目における育成評価の観点（関心、意欲、態度／思考、判断…）  
体験学習、職場体験学習、特別活動、総合的学習の時間、  
社会見学、修学旅行、部活動、ボランティア活動など
- 大学・短大、高専、大学院では  
ゼミ、グループワーク形式の授業、調査・実習、発表重視の授業、  
プロジェクト形式の課題解決型学習、インターンシップ、研究室、  
クラブ・サークル、アルバイト、文化祭、ボランティア活動、  
就職活動など

確認したいものです。

## 学校、そして大学でこそ育成が期待されるが、現状とのギャップが

そのような中で、やはり学校の存在は大きいと思われれます。子どもや若者は多くの時間、学校に関わっています。学校は教育を専門とする機関であり、教育は決して学力向上や知識伝達、研究指導に留まりません。そして、学力や研究力、知識習得は、「社会人基礎力」を高めることを通してより高まるとも考えられています。上図のように「社会人基礎力」を育成する場面は、かなり存在しています。したがって、それらをよりうまく活用し、育成がなされるようにしたいものです。

にもかかわらず、今の学校では、知識偏重ともなりがちな教育、特に都市部で顕著な入試の低年齢化による塾の影響や学習方法の変化、集団遊びの減少、部活動への参加率の減少などが見られ、学校における「社会人基礎力」の育成の機会は、決して増えてはいないようです。

社会に人材を送り出す大学でも、学問の伝達を重視する教員が、「社会人基礎力」の育成の基本的である、社会のさまざまな現場で活躍できる人材を育てるということに十分なし得ているかどうかには、残念ながら疑わしいものがあります。日本の大学教育は、世界的にも決して高くは評価されていません。産業界と学生の能力ギャップを埋め、その方向で大学生を育てようとするならば、大学教員にも、「自分は大学生を教育する教師でもある」という側面を重視し、引き受ける態度が大事になります。その側面を日本の大学関

係者は引き受けているのか、大学教員の職務を改めて考えてみることは必要でしょう。

例えば、大学で中等教育の教育法や評価法の研究をしている教育学系の研究者も、眼前の大学生に対する授業や、大学内のFD（ファカルティ・ディベロップメント）教員の能力開発）に対してはその方法論を適用していない、というのが現状のようです。

## 大学での育成のために考えてみるべきこと・心構え

したがって、「社会人基礎力」を大学で育成しようとするならば、例えば以下のようなことは一度考えてみる必要があります。

- ・学生の立場に立つて自らの授業を考えてみる
- ・学生の成長、例えば知識の習得、知力や学力の向上、個性の発見、人間としての成長とは何か、などを再考してみる
- ・大学生の多くは実社会に出て働くという現実を前提に置いてみる
- ・日本社会・産業界の急速な変容を、リアルタイムで認識しておく
- ・基礎的・汎用的能力（「社会人基礎力」に類するもの）を大学で教える必要性について

- ・「社会人基礎力」を高めるなら、それはどのような授業方法なのか
- ・それぞれの学問領域や大学固有の伝統という制約の中で、「社会人基礎力」育成の場面をどう考え、どう作っていくべきか

一方で大学生自身も、将来の社会を築く者としての自覚を持ち、その社会で活躍するための「社会人基礎力」の必要性に気付き、自ら鍛えるための挑戦をしてほしいと思います。本書は、そのような中、特に現実社会に向けた直接の人材育成・輩出をしている大学の教育で何ができるのか、を示すことを目指しています。

### 社会人基礎力はどのように育つのか

#### 経験が人の内部で構造化し、社会人基礎力を向上させ、人を成長させる

では次に、「社会人基礎力」はどのように育つのか、育てられるのかを見てみましょう。まず大きなポイントは、それが、いわば内的な経験知が構造化されたものと考えられることです。

「社会人基礎力」は、ある意味、行動様式や思考様式と言い換えてもよいでしょう。人は行動や思考を通して外界と対話し、生きていることを実感します。行動も思考も、人が自然に生活の中で行っている活動です。人はそういう生活の中で経験を重ね、多くは自然に、それら様式を身に付けてきました。

そしてそれらは、繰り返し意識化されることで、より安定したものになっていくのです。例えば、自らが用いる様式と異なる様式が、ある問題の答えを導くのに有効であった場合、その様式と問題と答えが結び付くことで、私達は新しい様式を学びます。つまり経験によって、人は新たな様式を獲得するのです。その気付きは、獲得した新たな様式を次の別の問題に試すことを促します。そうしているうちに、さらに新しい様式も習得され、それは、その人の外界との対話の幅、生き方の幅を広げていきます。こうした中で発現される個性は、より成熟したものとなっていくでしょう。これが「社会人基礎力」の向上が人を成長させると言われるゆえんでもあります。

#### 他者を含む場面・状況との関わりの実感が、社会人基礎力を定着させる

行動様式や思考様式は、外部の場面・状況などと具体的に関わり、そこでの経験や獲得した知識を操作し構造化する中で、形成されていくものと考えられます。人は生来、知識を構造化する生き物であるし、場面・状況に関与して生きるものです。とりわけ他者と、その場面・状況を通して深く関わる場合、その影響には大きなものがあります。こういう外界・他者との関わり合いが生きていることの実感となり、そういう実感こそが行動様式・思考様式ひいては「社会人基礎力」を定着させていきます。

#### 満足感・達成感は、育成に拍車をかける

ところで「社会人基礎力」は、その課題や場面や状況に関与したことで得られる満足感、自分の経験や知識を活用してそれを成し遂げたときの達成感などを通して育まれる、とも考えられます。そのときに得た満足感や達成感は、次にそれに似た課題や場面や状況に對峙したときの適切な思考や行動を可能にします。ただこれらは、関わる領域や対象の影響

を受けることも多いので、さまざまな課題や場面や状況を経験しておくことは有効です。またその上で、尊敬していたり親密な関係にあったりする人から高い承認をされる、平易に言うならほめてもらうことも重要です。より満足感や達成感を得られるからです。

### 少し困難な問題への取り組みで、意識的に伸ばす

さらに、より高い「社会人基礎力」が必要な困難な状況を乗り越えて、創造的な活動がなされる体験も重要です。それによって自ら進んで「社会人基礎力」を意識できるようになり、それをさらに伸ばせるようになるからです。そして汎用性のある行動や思考の様式すなわち「社会人基礎力」を獲得し、成熟した能力やスキルとしていくことができるようになるのです。

やってみて失敗したら、気付いてすぐに修正する。時には難しい問題にも挑み、成功すれば大きく成長するし、自信も付く。付いた自信から自分の強みを知り、強みをさらに意図的に伸ばしていく。そのようにして育てられていくのが、「社会人基礎力」と考えられます。そのためには、その難問にどれだけ深くコミットメントできるか、どれだけ時間をかけられるかも、重要なポイントになります。

### 社会人基礎力を育成する場面や状況

### 「3つの力」を育成するのに必要な条件

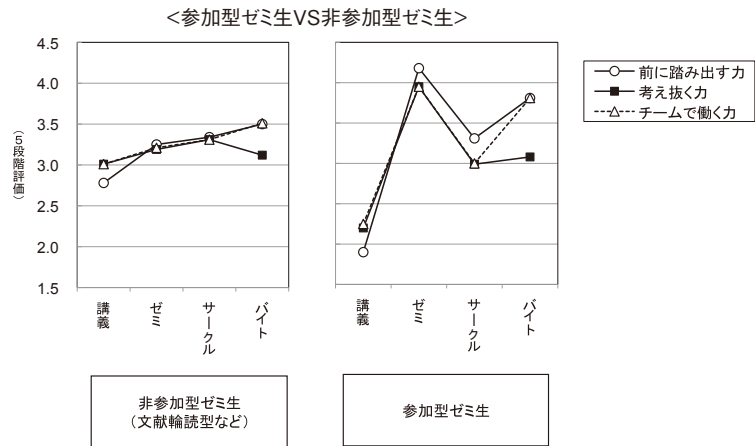
「社会人基礎力」を育む典型的な場面や状況のイメージは、「3つの力」に対応したものになると考えられます。

①「前に踏み出す力」を育てる場面・状況イメージ  
いかに自尊心を高めるか、達成動機を向上させるかがポイントです。自尊心としては「与えられた役割をこなすことで承認される」という経験をさせることが基本と考えられます。一方、達成動機は、「課題に深く関わることで高い達成感を得る」という経験が大事です。

②「考え抜く力」を育てる場面・状況イメージ  
基本的には、問題解決過程をいかに経験させるかが重要です。問題解決は、問題発見→問題理解→解決案→評価→実施という順でなされますが、その中でもとりわけ問題理解の際に、持っている知識の整理、新たな情報収集を行いつつ問題を分析・理解・表現して、自らの理解を問い直しつつ、問題の核心に迫っていく、そういう考える作業を経験させ、加えてそれを面白いと感じさせることが必要です。

③「チームで働く力」を育てる場面・状況イメージ  
いかにチームメイトと協働し、一つの目標に向かうよう仕組めるか、が重要と思われるます。そのためにはチームで、あるテーマに沿った活動を行うことは言うまでもありません。

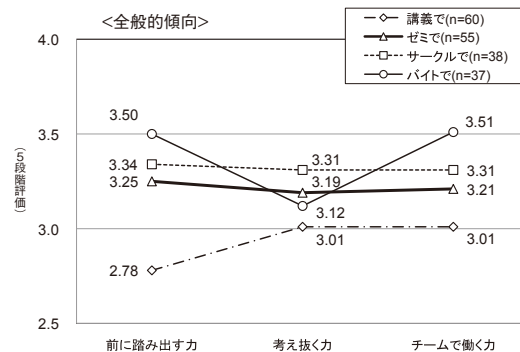
学生の活動と社会人基礎力の向上



※ 非参加型ゼミ生 講義n=60、ゼミn=55、サークルn=38、バイトn=37  
 ※ 参加型ゼミ生 講義n=25、ゼミn=25、サークルn=11、バイトn=21

資料提供 法政大学大学院政策創造研究科 諏訪康雄教授  
 ※平成19年「職業社会論」他の授業内で実施したアンケートより

学生の活動と社会人基礎力の向上



資料提供 法政大学大学院政策創造研究科 諏訪康雄教授  
 ※平成19年「職業社会論」他の授業内で実施したアンケートより

サークル、アルバイトも有効だが、  
 実は参加型授業がそれに勝る

せん。その中で各自が自分の役割を担い、その役割においては他のメンバーを指導するなどして自信を付けていくと同時に、チームメンバーからは自分にはないものを学ぶ、という関係作りが重要です。

大学生の場合、「社会人基礎力」は、学生の自主的活動であるサークル、クラブやアルバイトで育成されていると考えられることは十分できます。「社会人基礎力」に関する研究会の座長を歴任した諏訪康雄教授は、法政大学の自分の授業の学生を対象にした調査から、「サークル、アルバイトが『社会人基礎力』を高めた」と思っている学生が多いことがわかり、それら自主的活動は決して否定されるべきではない、との指摘をしています。しかし注目すべきは、参加・問題解決・知識活用型の授業を進める大学のゼミで「社会人基礎力」を高める活動を経験した学生は、アルバイト、クラブ、サークルとは比べものにならないほど成長感を感じている、ということでした。

実際に参加・問題解決・知識活用型の授業（ゼミ）に参加した卒業生の声を紹介いたします。

ゼミで学んだことは、全てが社会に出ていってから活かされることばかりでした。2年次の1ゼミで行った「大学生にとって魅力的な企業とは？」の研究も、最初のうちは先の見えない研究に不安やとまどいもありました。それだけに、チームで幾度となくサブゼミを繰り返して、議論を重ねながら作り上げた報告書は、私の財産です。

ゼミに入ったこと。これこそが私の大学生活を充実感と達成感に満ちたものにしてくれた、大きな成功ポイントです。チームで学ぶことが、私がゼミで学んだことの中で一番これからも大切にしていきたいことです。一人の力ではなく、人と意見を交わし、悩み、一緒に答えを出したり、作業を進めていくことがいかに大切なことか、学ぶことが多いかを実体験させていただきました。先生の先を見越したさまざまな教えを、社会に出て発揮していきたいと思っています。

参加型授業は今どきの学生を変え、低い国際競争力からの脱却も

このことは、大変注目に値します。なぜなら近年、大学生の授業出席率は上がってきているのです。出席率の悪さになすすべのなかったひと頃とは異なり、授業を、学生を成長

させる人間関係構築の場とすることが可能になっていくのです。

さらに、学生の意欲の低下、自主的行動の減少が指摘され、また一方で、大学生ではもう手遅れと揶揄されたりもする中で、たった一つの授業科目においてだけでも学生を変えることが十分にできる、ということを示しているからです。しかもそれは、日本の大学教育が国際競争力の低さから脱却する方略の存在も示唆していると思われる。

さらに参加型授業は、学んだ知識の定着のためにも有効であると考えられています。また、将来社会に出てから独学で学習していく生涯学習力や自己学習力を付けるためにも有効です。さらに、学生同士が対話しやすい場を用意することで、コミュニケーションの苦手な学生も人との交流が少しずつできるようになる、という生活支援面での効果も期待できるでしょう。「社会人基礎力」の育成を、授業の場で行おうとすることは、さまざまな意味で効用があると想定できるのです。

### 参加型授業の実施は、未体験の教員も多く、カリキュラム全体にも影響する

ならば早速、簡単なことからでも、「社会人基礎力」を育てる授業場面を作っていけばよいわけですが、それはなかなか難しいというのが現状のようです。

というのは、まず一つには、多くの先生方にそのような授業を行った経験があまりないということがあります。やはり、大学は学問的知識を伝える場と考えるのが基本ですから、学生に課題を示し、それに答えさせる授業をすればよいのだと言っても、具体的に何をどこまで行えばいいのか、教員自身がまず検討しなければなりません。

またもう一つには、そもそも、それぞれの科目には科目としての目的があり、カリキュラム全体の目的を実現する役割も担っているということがあります。学生の側も、カリキュラム全体の方向性の中でその科目を受講しているわけですから、教員も簡単に教育内容を変えてしまうわけにはいきません。

### 可能な範囲とレベルを見極めつつ、戦略的な実施を

となれば、カリキュラム全体を見て、ある科目には「社会人基礎力」の育成ができそうな場面（ゼミなど）があるからその一部でそれを意識した授業をしてみよう、担当教員の関心が高い科目で取り入れてみよう、またあるいは、特定の科目を「社会人基礎力」の育成を集中的に図る科目と意図的に位置付け、カリキュラムを組み換えてみようなど、科目環境を踏まえ、達成可能な範囲・レベルなども考慮し、それぞれに見合った育成の方法、変革の仕方を検討、実施していくのが望ましいと思われれます。

ここでは、「社会人基礎力」の育成法をめぐる基本的な考え方・方法、それに伴う教員・指導者の意識・役割の変革などを整理してみました。というのも、各大学で科目の置かれている状況は実に多様で、その多様さの中で、柔軟に「社会人基礎力」を育成していくためには、基本的な考え方・方法が理解されている必要があると考えたからです。

続く本書の3章以降では、具体的な活動における「社会人基礎力」の育成・評価の方法、大学・学部全体としての体制の作り方、さらに大学以外の教育機関での取り組みなどの事例を紹介しています。